

〈随筆〉 図書館の返却ポストについて

中川 豊

図書館の返却ポスト（ブックポスト）には何が入るか。

朝のミーティング後、まず行うのが返却ポストに溜まった図書・雑誌の返却処理である。メインカウンターに運び、予約状況や落書きなどを確認しつつ急いで返却処理をしていく。このときに予約が入っている図書は専用の書架に配架していく。

返却ポストに入ってくるのは貸出された図書・雑誌だけではない。図書館が定期購読している各種新聞も入ってくる。この点、返却ポストは通常のポストの役割も担っているといえよう。新聞の担当者はまず地元に関する重要な情報がないかをチェックする。例えば郷土に関する出版物・遺跡発掘・祭りなどの記事である。保存が必要と判断すれば事務室のコピー機で部分コピーをして切り取り、テーマごとに分類して台紙に貼っていく。昔から行われているいわゆる「スクラップ（切り抜き）」で、重要な郷土資料として蓄積されていく。

まだある。押しつけによる寄贈資料である。およそ十五年前、公立図書館に勤務していたときのことである。漫画数冊をチラシで包み、その上に「図書館に寄贈します」とマジックで書いたメモ紙を張り付けて輪ゴムで括り、返却ポストに投函されたことがあった。チラシとメモ用紙をお見せしよう（写真）。

構造的に困難な学校図書室の入り口などで見かけることがある。

公立図書館の開館時間はおよそ朝九時から夜七、八時頃までである。この開館時間以外が閉館時間である。一日で捉えると二十四時間のうち半分以上の十三時間ぐらいが閉館である。図書館閉館日は年間何日程か。まず週一回の休館日。通常月曜が多い。年末年始は一週間くらい休館日が設けられていよう。祝日は開館している図書館、閉館している図書館さまざまだが、当日は開館して翌日振り替えて閉館する図書館が増えてきている。さらに月一回の館内整理日や、年一回の特別整理期間が一週間から一〇日ぐらいある。以上のような休館日を踏まえると、公立図書館の年間の閉館日数はおよそ六十から八十日くらいである。指定管理者制度を導入している自治体の図書館であると、もうすこし少なくなるであろう。

ところで返却ポストの利用は、開館中はカウンターで行い、返却ポストは使用できないという図書館もある。ポストの口が開かないのである。これはカウンターに来てもらって速やかな返却処理を行うためだ。ともあれ、返却ポストの利点は、もちろん勤め帰りなどでも図書を返せる点にある。

では、返却ポストの最大のマイナス点はどこであろうか。それは図書を傷めることにある。

みなさんは返却ポストの投入口の蓋を上げて内部を覗いたことがあるだろうか。傾斜しているベルトコンベアのようなものが付いていることがある。これはローラー付返却ポストで、図書は投函口からローラーを滑ってコンテナ(カート)に落ちていく。なかには図書が溜まっていくと、その重さで徐々に底が下がっていく優秀なタイプ(沈下式)もある。食堂でトレイを返却した際に重さで次第に沈んでいく、あれと同じ原理である。いずれの場合も少しでも図書を傷めないための工夫である。

私が図書館に務め始めた頃、図書館には返却ポストにはローラーはおろか、スライドのための傾斜台もなかった。

唯一、図書の傷みを緩和する措置として返却ポスト内の底部にクッションが敷いてあるだけだった。しかし、これはやむを得ない措置であった。なぜならば、返却ポスト内が狭かったので傾斜台などを設置するとポストの中がさらに窮屈になり、肝心の収容能力を低下させる結果となるからだ。それはわかっていた。だが私はクッションだけの返却ポストは、どうしても承服できなかった。

ローラーや傾斜台を設置していない返却ポストを想像してほしい。ポストの口へ図書を差し込み、手から図書を離すと、図書はドサツと落下する。クッションに落下するとは限らない。すでにそこに図書が溜まっていれば、図書の上に落下する。ハードカバーの表紙の角にあたれば、そこが痛むだけでなく次第に表・裏表紙、背表紙と本紙との間にずれが生じてくるのである。ぐずぐずになる、という表現がふさわしかろう。特に雑誌などは開いて紙が折れる場合もある。さらに、その上に図書が積み重なっていく……。これほど図書を傷つける要因があるのか。

親子が図書を返しに返却ポストへやってくる。子供は図書をポストに入れたいと母親にねだる。子供が母親から図書を受け取る。母親は子供を抱っこして、子がポストに図書を一冊づつ挿入する。ドサツと図書が落ちる。またドサツと落ちる。最後の一冊を投入し終えてポストの中には再び静けさが戻る。子供は「図書は落としてもいいものだ」という認識を持たないだろうか？ 図書館は、よく「図書は大切に読みましょう」とか、「図書は大事に扱いますよ」とか、などと謳っている。しかし、一方で実は真逆の行為を容認しているのではないか。返却ポストは便利だ。しかし、図書にとって実はたまったものではないのだ。

話をもとに戻そう。私はポストの収納容積が少なくなろうとも、返却ポスト本来の機能が損なわれようとも、小さくてもいいから直接の落下を避ける傾斜台を最低限設置するべきだとの結論にいたった。館内で意見聴取の機会があったので、傾斜台を設置するように、私は意見書を事務長へ提出した。

図書館サービスは、効率性、利便性、時間の短縮（ランガナタン「利用者の時間を節約せよ」を重視して進んできた。OPACも予約も自動貸出機も相互貸借（三）もみなそうだ。返却ポストの機能もそれに漏れない。しかし、そこから発生するしわ寄せや弊害には、目を逸らしてきたように思う。返却ポストについて言えば、我々はいつでも返せるといふ利便性を手に入れたが、その代償としての図書の傷みには目をつぶってしまったのだ。

幸い、私の意見は理解されて小さな斜めの台が設置された。

返却ポストの利用について踏まえておきたい留意点がある。返却のタイムラグのことだ。利用者が返却ポストへ資料を投函した時点では、図書はまだ返却処理されていない。利用者による返却ポストへの「返却」時点と、職員による「返却処理」時点は異なる。例えば年末年始の長期閉館に入る前日の夜、利用者が延滞本を返却ポストへ返却したとしよう。するとその延滞本は返却処理されずに返却ポストで年越しをする。職員がやってくるのは、原則新年最初の開館日である。「原則」と書いたのは、返却ポストの図書を受け入れる空間のキャパシティが低いと図書が溜まりすぎて飽和状態になる場合があるので、いったん職員が返却ポストの図書を取り出しに行くという場合もあるようだ。連休明けに返却ポストへ向かうのは怖い。返却ポストには通常より何倍もの図書、雑誌、新聞が山積みになっているからである。長期閉館後は来館者も多い。返却処理はなかなか進まない。この時点においても、先ほどの延滞図書は返却処理を待っており、データ上ははまだ延滞のままである。仮にこの時点で、督促の電話をすれば、利用者は、「昨年末に返したよ！」という返事となり、トラブルを引き起こしかねない。返却ポストに投函された図書は、場合によっては返却時から返却処理まで長い時間を要することもあるのだ。ようするに長いタイムラグが生じるのだ。

最後に私も含めた返却ポストを利用する方々へ。もし、延滞をしてしまったら返却ポストによる返却ではなく、開館時間内にカウンターへ行き、返却が遅れたお詫びの気持ちを一言伝えてほしい。体裁が悪いからだろう、あえて返却ポストに入れていく利用者がいる。返却ポストに溜まった図書を返却処理していくとき延滞本が続くと、やはりいい気持ちはしないだろう。誰でも延滞の可能性はある。遅れたらカウンターへ持つて行き、「遅れました。すみません。」と一言いうと、職員も「今度からお気を付けてください」と告げずに済み、双方イヤな思いをしなくて済む。